胎蔵曼荼羅中台八葉部の構成

八田幸雄

一　『大日経』の問題

中台八葉部は胎蔵曼荼羅の核心をなすものである。しかし所依経典である『大日経』を見た限り、中台八葉部については充分な教理の確立がなされておらず、それらしきものが散見するだけである。『大日経』で中台八葉に関わるとみられる記述を拾ってみると次の通りである。(1)

(一)　具縁品。悲生曼荼羅……八葉正円満…金剛之智印　遍出諸葉間　従比華台中　大日勝尊現。

(二)　普通真言蔵品。「爾時諸執金剛。秘密主為上首。諸菩薩衆。普賢為上首。」

(三)　密印品。「毘盧遮那。観察大衆会。告執金剛秘密主言。」の書き出しから如来諸印を示した後「32普賢、33慈氏、34虚空蔵、35除一切蓋障、36観自在…43文殊…等」の真言を説く。この中で。印の尊をまとめると中台八葉部四隅の尊となる。

(四)　秘密曼荼羅品。「毘盧遮那。以如来眼。観察一切法界。入於法界倶舎。」…「中矧磨金剛其上妙蓮華……八葉悉円整。」

胎蔵曼荼羅中台八葉部の構成（八　田）

(五)　入秘密曼荼羅位品。「内現意生八葉大蓮華王……一切世間最尊特身。」…於彼東方宝幢如来。南方開敷華如来。北方鼓音如来。西方無量寿如来。東南方普賢菩薩。東北方観自在菩薩。西南方妙吉祥童子。西北方慈氏菩薩。」とあり、こゝに始めて中台八葉の尊名が具体的に出ている。

(六)　秘密八印品。ここには如来の特性を示す八印と真言が記されている。（　）内は『大日経疏』の説。

大威徳生　namaḥ samanta-buddhānāṃ raṃ raḥ svāhā/　……（宝幢）

金剛不壊　namaḥ samanta-buddhānāṃ vaṃ vaḥ svāhā/　……（開敷華）

蓮華蔵　namaḥ samanta-buddhānāṃ saṃ saḥ svāhā/　……（弥陀）

万徳荘厳　namaḥ samanta-buddhānāṃ haṃ haḥ svāhā/　……（鼓音）

一切支分生　namaḥ samanta-buddhānāṃ aṃ aḥ svāhā/　……（普賢）

世尊陀羅尼　namaḥ samanta-buddhānāṃ buddha-dhāraṇi

胎蔵曼荼羅中台八葉部の構成（八　田）

smṛti-bala-dhāna-kari dharaya sarvaṃ bhagavaty-ākāravati samaye svāhā/ ……（観自在）
如来法住　namaḥ samanta-buddhānāṃ a veda vedi svāhā/ ……（文殊）
迅疾持　namaḥ samanta-buddhānāṃ mahā-yoga-yogini-yogeśvari khāṃjalike svāhā/……（弥勒）

『大日経』の曼荼羅の記述は以上の通りであるが、これを統一的にまとめた一つの観方は『大日経疏』であり、この疏をもとにまとめていったのは胎蔵四部儀軌と呼ばれる『摂大軌』『広大軌』『玄法寺軌』『青竜寺軌』である。『大日経疏』では入秘密曼荼羅位品の八尊と密印品の八印とを関係づけて中台八葉部を確立している。

次に図像の分る曼荼羅としては『胎蔵図像』[2]『胎蔵旧図様』『現図』[3]があり三昧耶形の曼荼羅としては『大悲胎蔵三昧耶曼荼羅』と『胎蔵三昧耶図』とがある。これらを比較対照することによって中台八葉の性格はより明らかとなる。

この中で『胎蔵図像』と『大悲胎蔵三昧耶曼荼羅』（以下『三昧耶マンダラ』という）は同じ系統のものである。但し後者は前者に比べて新しく教理的にも進んだものを持っている。『胎蔵図像』から発展し不空系の思想を入れたものが『胎蔵旧図様』であり、それを発展させ増広したものが『現図』である。一方『大日経』の秘密曼荼羅品を中心にしながら『大日経疏』の説をとって発展的に示したのが『胎蔵三昧耶図』[4]である。この図は中台八葉部の構成に関する限り『胎蔵図像』とは異系統のものである。そこでこの二つの系統のマンダラの構成を明らかにして中台八葉の世界を探っていきたい。

二　『胎蔵三昧耶図』[5]

中央	大日	円輪の中に方形あり、その中に五輪塔	
東	宝幢	大威徳生印	蓮上三角内に宝珠四つの三角が囲む
南	開敷	金剛不壊印	蓮上の金剛杵を四金剛杵が囲む
西	弥陀	蓮花蔵印	蓮上の初割蓮華を四蓮華が囲む
北	鼓音	万徳荘厳印	半月風輪の中に手印を示し点がとりまく
東南	普賢	一切支分生印	円輪内の瓶を四金剛杵が囲む
西南	文殊	法　住　印	方形の中に青蓮と二点を示す
西北	弥勒	迅疾持印	方形の中に手印
東北	観音	世尊陀羅尼印	虹形の上に幢幡、金剛杵が囲む

種子、四方の中央に āṃ khāṃ aṃ ah/
四方の両側に raṃ raḥ : vaṃ vaḥ : saṃ saḥ : haṃ haḥ/

右に示したように『胎蔵三昧耶図』は経の入秘密曼荼羅位品に出る中台八葉部の八尊は秘密八印品に説く八印に他ならぬものとする『大日経疏』の説に基づいていることが分るのである。そしてこの八尊を象徴する図像も疏の説に基づいているのである。したがって八葉の真言は当然に秘密八印品の

真言が充当されることになる。

この形は『摂大軌』『広大軌』『玄法寺軌』『青竜寺軌』にとり入れられ、更には日本に伝承される『胎蔵法』はみなこの形式によっている。

『胎蔵三昧耶図』の円輪円の四方の種子 raṃ raḥ: vaṃ vaḥ: saṃ saḥ: haṃ haḥ: は秘密八印品の大威徳生、金剛不壊、蓮華蔵、万徳荘厳の諸印の真言の種子である。そしてこれらの種子真言のもとになるのは『大日経』に説かれた法界平等観の真言であり、また円輪の中に記された āṃ khāṃ aṃ aḥ の種子もこの真言の中に類似のものがみられるのである。それを示せば次の通りである。

namaḥ samanta-buddhānāṃ asamāpta-dharma-dhātu-gatiṃ-gatānāṃ sarvathā aṃ khaṃ aṃ aḥ saṃ saḥ raṃ raḥ vaṃ vaḥ svāhā hūṃ raṃ raḥ hra haḥ svāhā raṃ raḥ svāhā/ (18-31b)

この真言は法界平等観、又は大真言王とも呼ばれ、『胎蔵法』の行法では大日如来の身口意三法界の平等を観ずる印言とされてくる。そのためにはこゝに説かれた十二字を身体に配して観想を深めていく。アム頂、クハム右耳、アム左耳、アフ額、サム右肩、サフ左肩、ハム心、ハフ背、ラム臍、ラフ腰後、ヴァム左右の股、ヴァフ左右の足と観じ、自己の身体はそのまま大日如来と観想していく。更に『胎蔵法』では遍法界無所不至の印言をもって自身即大日の確信を深めるのである。印は大率都婆印を結び、自己は法界塔婆大日となると観想して無所不至の真言を誦する。

namaḥ sarva-tathāgatebhyo viśva-mukhebhyaḥ sarvathā a ā aṃ aḥ (18-18b)

更にこの究極の世界は自己自身大日となり、光の主体となることから百光遍照の主体である〝暗字 aṃ〟となると観想し、こゝに中台の中心尊大日の観想法が完成するのである。

このように見ると『胎蔵三昧耶図』の中台八葉部は単に『大日経疏』の説をもって入秘密曼荼羅位品の八尊と、秘密八印品の八印とを結びつけただけではなく、経の法界平等観の真言をとり入れて行者の身体即大日とし、それが中台八葉と関わることを明示するとともに、大日の体得が法界塔婆の体得であり、光明の体得であるとして、中台八葉の観法を完成しているのである。

三 『胎蔵図像』[3]

『胎蔵図像』は中台八葉の尊が確定している。毘盧遮那は定印、宝幢は触地印、開華王は与願印、無量光は定印、慈氏は瓶、観自在は蓮華、曼殊室利は青蓮、普賢は剣を示している。この中で四方の四仏はすべて釈尊の印である。これに大乗仏教の主要尊である慈氏、観自在等の諸菩薩を配し、中尊に毘盧遮那を据えて、釈尊の曼荼羅に即して密教の曼荼羅の

世界を示そうとしている。

四方の四仏は古くからある四方仏の思想に基づき、それが釈尊の世界を示すようになり、『胎蔵図像』では中尊を毘盧遮那とすることにより大日の曼荼羅となっていくのである。そしてこの系統の図像は金剛界曼荼羅の四仏、即ち阿閦、宝生、無量寿、不空成就になっていく。一方『胎蔵旧図様』では胎蔵四仏の特性を示すために、図像を一つずらせ弥陀は固定して――新しい曼荼羅を作っていく。即ち宝幢は与願、開敷華は施無畏、弥陀は力端定印、天鼓は触地印とする。この形は『現図』に継承されていく。

さて『胎蔵図像』の四方四仏は伝統的な四方仏をもとにした釈迦の曼荼羅を基礎にしているが、中台八葉部を形成するにあたっては『大日経疏』の説を参照していないところに特色がある。それは『大日経』そのものの中から疏とは別の方法で中台八葉部を構成しているのである。このことは毘盧遮那、弥勒、観自在、文殊、普賢の図を示した横に『大日経』に示された真言文が併記されていることから分るのである。それを示せば次の通りとなる。

毘盧遮那　namaḥ samanta-buddhānāṃ asame trisame samaye svāhā/（入仏三昧耶）
　　*namaḥ samanta-*vajrānāṃ* dharma-dhātu-svabhāvako 'haṃ/（法界生）
　　*namaḥ samanta-*vajrānāṃ* vajrātmako 'haṃ/（以上18-24b）（転法輪）
　　（但し『大日経』の帰命句は *buddhānāṃ）
弥勒　namaḥ samanta-buddhānāṃ Oṃ ajitaṃjaya sarva-sattvāśayānugata svāhā/（18-26b）
観自在　oṃ sarva-tathāgatāvalokita-karṇā-maya ra svāhā/（18-26c）
文殊　oṃ he he kumāraka vimukti-pathita smara smara pratijñāṃ svāhā/（18-27a）
普賢　oṃ samantānugate vajra-dharma-nirjāta mahā mahā svāhā/（18-26b）

右の真言文の中で毘盧遮那の三真言は密印品に出るものであり、その中の始めの二つは別の箇所でも出る真言である。第三番目の真言は金剛頂経系にも出る真言で、『不空三巻本』『心軌』にも出るものである。特に帰命の句が buddhānāṃ→vajrānāṃ とあることは『大日経』自体にも金剛の思想が濃厚であるが、一方金剛頂経系の思想も入っていることを示すものである。

弥勒以下の中台の四隅の諸尊の真言は普通真言蔵品、密印品に出る真言であり、ここから見るに『大日経』の立場から疏の説に依らずに独自に中台八葉部を構成したことが分るのである。

四　『三昧耶曼荼羅』

『三昧耶曼荼羅』は『胎蔵図係』の伝承をよく踏襲しているが中台八葉部の五仏は独自の図像を示している。[8] 中央毘盧遮那は三角智印をとりまく金剛杵。これと類似するのは42一切如来印（遍知印）である。四方の四仏はすべて如意宝珠を中心に、宝幢は金剛が囲み、開敷華は金剛が蓮華と化したものがとり囲み、弥陀は蓮華が囲み、鼓音は天鼓がとり囲む図である。ここでは智火と如意宝珠の組み合わせで五仏の世界が一体のものであることを示し、如意宝珠より生ずる働きは金剛→金剛の華化（智慧の大悲への転化）→蓮華（清浄心と大生命）→鼓音（説法教化）に展開していくことを示している。この考え方は『五部心観』の思想と類似する。

『三昧耶曼荼羅』はこのように宝珠の信仰が強く出ている。これは中台の諸尊に留らず、中台の諸尊をしめくくる虚空眼、毫相は如意宝珠と関わるものであり、更に『現図』にあって遍知院には三角智印の他に、仏眼仏母と大勇猛菩薩が配されているが、『大日経疏』を参照すると如意宝珠に関わる尊である。『現図』はこの他に地蔵、除蓋障、虚空蔵の尊を各部の主尊として配するが、皆如意宝珠を示している。また『胎蔵三昧耶図』の宝幢の印は三角智火の中に宝珠を示しているのである。

『現図』の立場

『現図』の四方四仏は『胎蔵旧図様』の形式を踏んでいる。一見『胎蔵図像』『三昧耶曼荼羅』そして『胎蔵三昧耶図』とは別図のようであるが、これらの曼荼羅の趣旨はよく生かされている。

中台八葉の蓮葉の間より出る金剛は金剛の智恵との関わりをよく示し、中台八葉院の四隅の四宝瓶は浄菩提心の宝を示し、それは如意宝珠と連なるものである。中尊大日より出る五色の光背は五智を示すとともに五輪の法界塔婆を暗示する。四方四仏の図像は『胎蔵旧図様』の形式を踏み、釈迦の図像に即しながら胎蔵大日の諸徳を強調しているのである。更に『現図』は中台八葉院とともに遍知院と持明院の尊を一組みのものとしてみるとき、『大日経』の未完な教理を勝れた立場で完成していることが分るのである。

1　大正蔵経十八巻の中㈠六下、㈡一四上、㈢二四上、二六中、㈣三四上、㈤三六下、㈥三七上～中
2　大正図像二巻、一九七頁以下
3　大正図像二巻、三二九頁以下
4　大正図像一巻、六二五頁以下
5　大正図像一巻六二五頁以下図版二
6　大正図像二巻三三四頁～三三七頁

（関西学院大学講師）